



近藤昭一・神谷裕議員、 上海・蘇州を訪問

高質量発展の現場を体感し日中交流深化を呼びかけ



「日本留華卒業生中国高質量発展体験団」歓迎式にて「外国留学生学籍記念カード」を贈呈された近藤昭一議員（右）と神谷裕議員（左）

（写真提供：近藤昭一事務所）

2025年8月10日から14日にかけて、超党派の日中友好議員連盟幹事長である近藤昭一衆議院議員を団長、副団長に神谷裕衆議院議員を迎えた「日本留華卒業生中国高質量発展体験団」が中国を訪問した。訪中団には国会

議員5名と自治体議員3名、さらに知中派の学者や経済人らが加わり、多彩な顔ぶれとなった。今回の訪中は、両国関係が承前啓後の局面にある中で、教育・人文交流を通じて相互理解を深めることを目的としている。

歓迎式では、中国教育国際交流協会の王魯新副秘書長が挨拶に立ち「中日関係は今、歴史的転換期を迎えている。両国指導者の合意を指針に、人文交流と実務協力を一層推進し、戦略的互惠関係を前進させたい」と述べた。また、王氏は訪中団メンバーに対し、中国社会の高品質発展の現状を日本に伝え、日中友好の架け橋となることへの期待を表明。さらに、かつて北京語言大学に留学した近藤・神谷両議員に「外国留学生学籍記念カード」を贈呈する一幕（P1写真）もあった。

代表団は上海と蘇州を訪問し、ハイテク企業や研究機関を次々と視察。AI音声認識分野で知られる思必馳、再生可能エネルギー分野の協鑫能源、ICTの巨人であるファーウェイ、スタートアップ支援で注目を集める智元新創などを訪れ、中国の先端技術とグリーン開発の最新成果に触れた。あわせて、現地の若手企業家や研究者との座談会では、「イノベーションと協力機会」をテーマに、スタートアップ育成政策や日中共同研究の可能性について活発な意見交換が行われた。

文化的視点からの理解も重視され、代表団は中共一大会址記念館を訪れ中国共産党創立の歴史を学んだほか、李良濟国医館では中医学の診療現場を体験、蘇州博物館や高新区展覽ホールでは古都の歴史と現代都市開発を併せて視察した。訪中団の行程は単なる表敬にとどまらず、政治・経済・文化の複合的理解を深める内容となった。

近藤昭一議員の感想

近藤議員は、自身が北京語言大学に留学した経験を振り返りながら、「当時、中国で学び、共に生活した日々が今の私の原点です。『忘れられない中国留学エピソード』の特別受賞者として、次世代にこの貴重な体験を語り継ぐ使命を感じています。今回の訪中では、中国が環境保護や再生可能エネルギーで果敢に挑戦する姿勢に感銘を受けました。日中両国は歴史認識や安全保障など多くの課題を抱えていますが、実際に現場を訪れ、企業や市民と率直に語り合うことで、相互理解は確実に進むと確信しました。今後も草の根交流を積み重ね、両国民の心を結ぶ絆を太くしていきたい」と語った。

神谷裕議員の感想

神谷議員も、かつての中国留学経験を「人生の転機」と位置づける一人だ。「学生時代に中国で過ごした日々は、私にとって大きな挑戦であり、同時にかけがえのない学びの場でした。『忘れられない中国滞在エピソード』特別受賞者として、留学や研修を通じた人材育成の大切さを実感しています。今回の訪問では、中国の若手起業家と率直に意見を交わし、互いの課題やチャンスを共有できたことが印象的でした。教育と青年交流は、日中関係を持続可能にする最良の投資です。次世代が互いの国を理解し、共に課題解決に挑む未来を築くため、私は議員として全力で支援したい」と述べた。

なお、同年2月には在日中国大使館が「教育新春交流会」を開催し、阿部俊子文部科学大臣、近藤・神谷両議員らが出席して教育・人文交流の重要性を確認していた。今回の訪中は、その延長線上にある取り組みとして位置づけられる。東京で芽生えた対話が、上海・蘇州での実地交流につながり、さらなる協力への道を開いたといえよう。



近藤議員、神谷議員の作文が掲載されたコンクール受賞作品集



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

私にとって中国留学とは何だったのか？

衆議院議員 近藤 昭一



万里の長城に登った筆者

社会制度や習慣の違う国を見たい。多くの人が関心を持ち、海外旅行をするきっかけでもあると思います。私は日本を見つめるため、自分自身を見つめるため、じっくりと、ほかの国に住んでみたいと思いました。

それを実現するため、私は、大学時代に休学をして、1981年9月から1983年2月まで北京に留学しました。当時は、まだ中国に留学する学生は多い時代ではありません。一方で、英語圏などと異なり、外国からの学生を受け入れる学校も多くはなく、限られた学校に集中していました。また、私の場合は語学留学ということもあり、当時も今も外国人への中国語教育で最も優れた学校のひとつである北京語言学院（現在の北京語言大学）に留学しました。

私が中学生だった頃、国交正常化が実現し、全国で記念物産展が開かれ、空前の中国ブームが起きました。毛沢東語録がはやり、多くの人が関心を持つ、ある意味で神秘の国でした。なぜ、それまで国交がなかったのか。共産主義の国の人はどんな生活をしているのか（失礼な話ではありますが）、多いに興味を持ちました。

留学した私は、極力授業だけではなく、多くの中国の人と接したいと思いました。同時に、この機会を利用して、他国からの留学生とも交流したいと努めました。シ

リア、タイ、カンボジア、ペルー等々、PLOの学生も来ていました。

しかし、当時の中国は、文化大革命の余韻もまだあり、外国人に、日常の生活をさらしてくださるような方はなかなかいません。そんな中、北京に到着した、その日から、親身に付き合ってくださったのが顧士元さん一家です。元々、北京の美術彫塑工場の技術者の方で、我が家との関係は、南京一名古屋の友好都市提携記念で南京市から名古屋市に「華表」（石柱、標柱）が贈られたのがきっかけでした。これは、同市の郊外にある梁朝（六世紀）時代のものの複製ですが、製作されたのは北京の工房で、その技師として来日したのが顧士元さんでした。顧さんが、留学のため中国に渡った私を北京空港に迎えに来てくださった時のことは、一生忘れられません。実は、私の中国語は、第三外国語で1年勉強しただけですから、会話は全く通じず、とても、顧さんと話ができるようなものではありませんでした。ですから、顧さんがクルマで迎えに来てくださり、日本語の出来る先生が同乗してきた学校手配のマイクロバスに乗る他の留学生の人たちと離れるのは大いに不安だったのです。

そんなクルマ（当時、中国で多かった「上海」）の中、話題もなく、中国語も出来ない私が、何か話さなければと、発したのが「这是你的汽车吗？」（これは、あなたのクルマですか？）でした。よく考えれば、わかったはずなのですが、共産主義の中国では、当時、個人所有のクルマは存在しませんでした。その時の顧さんの戸惑った表情は今も鮮明に思い出されます。

顧さんは、「中国には、個人のクルマはない。個人的に運転免許を持っている人もいない。このクルマは会社のクルマであり、運転しているのは会社のドライバー、今日は休みをとって来てもらった」と。ただ、中国語のほとんど出来ない私は何を言っておられたのか、その時は分からず、後日、顧さんのおうちに招かれた時に分かったのです。一緒に行ってくれた、日本人の友人が通

訳してくれて、一同、大笑いとなりました。その友人は、暫く北京にいた後、浙江省の美術学院に移って行ったのですが、大いに助けられました。

顧さん一家には本当に家族同様に大事にかわいがってもらいました。泊まりにも行きましたし、顧おじさんと、二人で自転車をこいで夕涼みに天安門広場などに行きました。もちろん、帰国する際には、家族総出で送ってくださいました。実は、中国では、一度会えば、老朋友（古くからの友人）とされて、人によっては、なんだと言われる方もおられるのですが、中国では、真の友人を「自己人」と呼びます。顧さん一家と私たちは、まさしく自己人でした。私が帰国した後、顧さんの息子さん、お孫さんが、日本に留学した際には、父が保証人を務めました。

留学から帰国した後、新聞社時代、政治家になってからと、時々、中国に訪問するのですが、毎回、必ずホテルに会いに来てくださり、母へのお土産をくださるのです。また、都合がつく時には、食事に呼んでくださいます。しかし、驚くのですが、私の留学生時代は、共産主義の中国では、個人経営などの民間レストランは皆無で、人民中国が成立する以前からある、いわゆる老舗の店が、国営である他は、数少ない簡素な食堂があるだけでした。

それも、夜はほとんど営業していなかった気がします。それが、今では、先進国と言われる多くの国と変わらない、おしゃれな民間レストランが溢れ、そうしたお店の個室で顧さん一家がもてなしてくださるのです。そして、私が北京に着いたばかりの時に恥ずかしい思いをした、個人所有のクルマで迎えに来てくれるのです。正直言って、こんなに早く経済的な発展を遂げるとは想像だにしていませんでした。地方と都会の格差が課題ではありますが、その急速な経済発展には目を見張るばかりです。鄧小平さんの進めた改革開放政策の成果とそれこたえた人々の力なのだと思います。

留学から、30年以上が経ちました。きっかけをつくってくれた父はいませんが、顧さんとの交流は、世代代と続きます。これからも、日本人と中国人との関係がwin-winの関係で深く発展していくように、頑張りたいと思います。



近藤 昭一（こんどう しょういち）

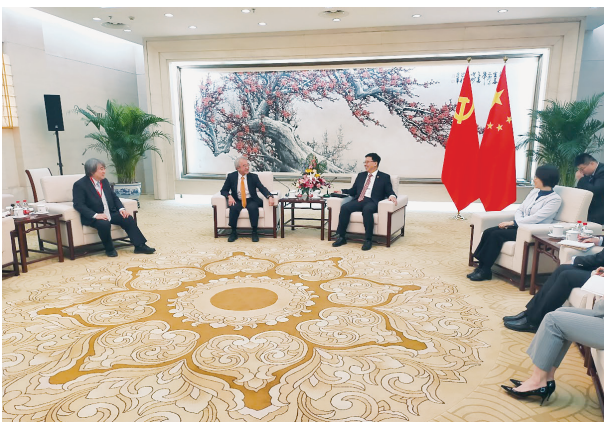
衆議院議員（8期）、立憲民主党副代表、リベラルの会代表世話人、立憲フォーラム代表。環境副大臣（菅第一次改造内閣・菅第二次改造内閣）、衆議院総務委員長、衆議院懲罰委員長等を務めた。

1958年5月26日愛知県名古屋市中村区生まれ。愛知県立千種高等学校、上智大学法学部法律学科卒業。大学時代には、中国の北京語言学院へ留学。卒業後、中日新聞社に入社した。

「私の中国物語」その②

困ったら原点に立ち返って真っすぐ進んでいきたい

衆議院議員 神谷 裕



中国共産党中央対外連絡部の趙世通部長助理と会談

私が大学の恩師の計らいを得て、北京に留学したのは1992年の事でありました。日本の大学で国際文化を学んだ私ですが、「国際文化」というように、大学の専修

に当たっては研究する地域を選択しなければなりません。アメリカ、ドイツ、中国、ロシア等など、8つの地域から中国を選んだ私ですが、選んだ理由と言えいい加減で、何度見てもチンペンカンブンの英単語等の横文字よりは、子供の頃から接している漢字を使う中国専攻であれば、落第する可能性も少ないであろうと、安易かつ妥協的な理由で専攻を選ぶことになりました。

安直な理由で決めた私の専攻ですが、その後少くない幸運にも恵まれ、恩師である指導教授の手引きにより中国の北京に留学する機会を得ることになります。

北京での留学生活は、まだまだのんびりした空気を残す当時の大学の所在地であった北京の五道口の雰囲気とは違い、想像以上にハードなものでした。

そもそも漢字を使う中国語であれば落第しないと考え

でのスタートです。いい加減な学生が、要領の良さだけで卒業してきたのに、それが何を間違えたのか試験の結果、2年生に編入してしまった事が間違いのもとでした。

いきなりの100%中国語の授業（当たり前ですが…）に、面食らいながら、それでもとにかくついていかなければと、人生で一番勉強したのは間違いなくこの時期です。それでも足りず友人のつてを頼り、对外経済貿易大学の学生さんに家庭教師をお願いし、ボンコツの学生を少しづつまともな学生に正していただきました。そうでなければ無事に留学を終えることも出来なかったと思い、当時の先生や友人には本当に感謝です。

街は徐々に経済改革の成果が浸透しはじめ、手形小切手法の制定、会社法や破産法など、急速に経済法制的整備も進み、道路には軽自動車の箱バンを活用したタクシーが走り出し、ピザやマクドナルド等、留学生には懐かしくも誘惑的な文化が次々と入ってきた頃でもありました。

私の恩師であり、道を開いていただいた鄧鋭齡教授は、日本の学生への指導を終えられ、ご自宅のある北京市の報子胡同に戻られ、亜運村（北辰路）にあった社会科学院中央民族研究所に復職されておりました。時には、勉強の進捗や近況報告をするために迷惑にも友人を多数ともないご自宅にもお邪魔しています。

伝統家屋である四合院を少しだけ修繕して住まわっていた鄧教授は、既に高齢であったので、居室を出るたびに外を歩かなければならない四合院での暮らしは中々大変だったのではと思います。既に2人のお嬢様は成人され、それぞれ国内外で研究の道などご活躍だとも伺いました。

高校のロシア語の教師であられた奥様とは、大変に仲もむつまじく、常にご一緒だったのを記憶しております。日本に教鞭をとるためにご夫婦で来日されたその時は、日本語も出来なかったという事で、日常の買い物を含め大変であったのではと思います。いまから思えば、もう少し日本での生活のお手伝いが出来なかったのかと反省しきりです。

どうかこうにか先生の厚情もあって北京での勉強をスタートさせましたが、留学生の楽しみの一つは長期の休暇を利用しての旅行です。

当時は高速鉄道も無く、夜行列車が当たりまえ。中には3泊、4泊の列車泊もありましたが、お金は無くとも時間はたっぷりとする学生にとってはむしろ宿代が割れ

ると大いに利用させてもらいました。また、まだ外国人料金のあった当時の鉄道で、留学生は内国民としての扱いを受けており、その面でも優遇されておりました。

北京、南京、上海、無錫、大連、瀋陽、西安、成都、重慶、武漢、昆明、西寧、ラサ、貴陽、広州、深圳、福州、寧波、杭州等、挙げればきりがなく多くの街をお邪魔した私ですが、分けても強い記憶に残っている旅があります。

それは北京から西安に向かう列車の旅でした。いつものように硬臥の座席を陣取ると、同じコンパートメントにはある一家が一緒になりました、小学校就学前の男の子、その御両親におばあちゃんといった構成でしょうか、三段ベットで一番下の値段が一番高価でしたが、その一番下の私のベットと印象で言えば80代くらいのおばあちゃんが持っていた一番上のベットを交換することにしたのが最初の仲良くなったきっかけです。道中ではミカンやおやつ交換から、男の子のお気に入りのおやつである「サトウキビ」と食べ方のへたな私をみながら、皆さんと楽しいひと時を過ごしたのを良く覚えています。

そのような中、昼過ぎのゆったりした時間の中で、おばあちゃんと二人で向き合う事になりました。

「戦争のときは、日本軍に殴られたり大変だった。」非難するわけでもなく、窓の外を見ながら、思い出すように訥々とお話を始められました。

それに対し、直ぐに「大変に申し訳ない事でありました」と申し上げる私。

それに対して「あなたのせいではありません。」

そして、「大変に不幸な時代だったと思います。でも、その結果として今がある。あれはあれで仕方の無い事だったと思います。」と淡々と告げられました。



かつての中国留学生の皆さんと訪中した際に

私はただただ頭を下げて、何もしゃべる事はできませんでした。

ひとときの沈黙のあと、男の子が戻り、また元の団らんが始まりました。

こういった多くの中国の皆さんの善意があつて日中国交の正常化があり、多くの感情が時に爆発しながらも「友好」の尊さが確認されているのであると思います。

留学を終えて直ぐ、これまた偶然の結果、政治の世界で働く機会を得ます。

当時の日中友好協会副会長でもあった鳩山邦夫衆議院議員です。

彼は田中角栄の秘書をしていたこともあり、日中友好条約締結の際には本当に大変な緊張の中で決死の覚悟で臨んだという話も、お酒の傍ら、話して聞かせてくれま

した。田中先生は、田中先生として過去に向き合い、彼なりの善意ある責務を果たされたのだと思います。

今日、図らずも自らが衆議院議員になり、政治に携わる状況になりましたが、あの時の田中先生や鳩山先生の覚悟には到底及ばないものの皆さんの所期の思い、井戸を掘ってくださった皆さんの思いをこれからも大切にしていきたいと心底考えています。だからこそ時に悩むことも多いのですが、困ったら原点に立ち返って真っすぐ進んでいきたいと思っています。

神谷 裕 (かみや ひろし)



立憲民主党衆議院議員（三期）。1968年東京生まれ、1992年3月帝京大卒業後、北京に留学、その後衆・参議員秘書、大臣秘書官、日本鯉鮭漁協組合勤務、2017年10月衆院選初当選、2021年10月衆院選二期目当選、農林水産委員会、沖縄及び北方問題特別委員会に所属、党政務調査会副会長。

「私の中国物語」その③

唐の時代へタイムスリップ

音声配信者 清水 絵里子



中国古典舞踊『清平調』の発表会の様子（最前列、向かって左が筆者）

「雲には衣裳を想い 花には容を想う」。唐の時代の詩人、李白が詠んだ歌『清平調』の一節である。今もなお「世界三大美人」に数えられる楊貴妃の美しさが表現されている。詩を現代語訳すると「うららかな春の日、空を流れる雲を見ると楊貴妃の衣装が目浮かぶ。牡丹の花を見ると楊貴妃の艶やかな姿が目浮かぶ」となる。令和の時代に生きる日本の若者でさえ「春のぼかぼか陽気に包まれ思い浮かべる推しのファッションYYDS（永

遠の神）！ 桜の花を見て思ったけどやっぱり君しか勝たん！」とまで言うことはそうそうないだろう。しかし、私は時代と国境を越え、21世紀に、中国で体感することができたのだ。唐の時代に思わずうっとりとするような言葉でしたためられた優美な世界観を。

新型コロナウイルスの感染拡大により、日中の往来が容易ではなかった2020年、私は念願叶って広州に渡航した。現地での生活を思いっきり楽しもうと街に繰り出すと、漢服を身にまとい堂々と歩く人々の姿が目に残った。漢服とは、漢民族の伝統衣装の一つで、七夕伝説の織姫と彦星のイラストに描かれるような長い裾や袖が特徴的だ。当時、漢服ファッションは中国のZ世代と呼ばれる若者の間で大流行し、公園や観光地だけではなく、レストランやショッピングモールなど街の至る所でよく見かけた。中国版Instagramと呼ばれるSNS「小紅書」で検索してみると、トレンドに敏感な女性たちが美しい写真をたくさんアップしていた。動画の投稿もあり、漢服を着用しながら踊っている人もいた。中国の古典舞踊だった。伝統的な音楽に合わせて舞うたびに、長い裾や袖がひらひらと揺れる姿は非常に優雅で、一瞬で心を奪われた。

私はすぐさま中国古典舞踊を習える教室を探した。体験レッスンに足を運ぶと、「你好」に続けて「Hello」と声を掛けられた。名前から外国人だと察した受付スタッフが気を利かせて挨拶してくれたのだ。在籍していた先生たちは、中国で有名な芸術大学を卒業した人ばかりで、姿勢や所作、一つひとつが美しかった。独特な動きに戸惑う私に、身振り手振りを交えて丁寧に教えてくれた。生徒には英語が得意な人もいて、先生の説明をわざわざ通訳してくれた。踊りはもちろん、踊る人たちの心の美しさにも感動し、こうして私は日本人どころか外国人が一人もいないローカルなダンス教室に通い始めた。

練習を重ねれば重ねるほど、魅力にどっぷりとはまっていた。一口で中国古典舞踊と言っても、時代や民族によって特色が大きく異なる。長い歴史を持ち、56の民族が存在する中国の文化は奥深い。先生から「漢や唐の時代が古代文明史上で最も文化が栄え、踊りも優美で豊富だった」と教えてもらった。これは俗に「漢唐舞」と呼ばれ、私が一番好きな踊りになった。

「『清平調』という作品を踊りたい人募集中！」ある日、教室から新クラス開講の知らせが入った。「漢唐舞」を代表する作品の一つだと知り、迷わず申し込んだ。柔軟性や難度の高い技に挑戦することや、今にも踏みそうなほど長い袖で雲の流れを表現することは難しかった。それでも、絶世の美女、楊貴妃を彷彿とさせる華麗な音楽や振り付け、衣装がたまらなく好みだった。

一カ月半ほど通い詰め、迎えた最終レッスンの日、先生の言葉に衝撃が走った。「発表会では皆で唐の時代のヘアメイクをしましょう！」憧れていた容姿に近づける

ことに胸が高鳴ると同時に困惑した。唐の時代の化粧をしたこともなければ、どういうものなのか想像もつかなかったからだ。「日本人なのでどうしたらいいかわかりません…。」こう呟いた私に、一緒に踊ってきた仲間たちから笑いながらツッコミが入った。「私たちだって分からないよ！」そうだった。ここにいる全員、生きているのは現代だ。そこに国籍は関係ない。言われてみれば私だって、平安時代に流行したヘアメイクなんて全然知らないじゃないか。先生の指導のもと、柳のように細く長く眉毛を描き、赤色を基調とした目元や頬に仕上げ、眉間には花の絵柄を入れた。髪はまるで『サザエさん』のように結び上げ、牡丹や雲の形をした髪飾りを付けた。踊りはもちろんのこと、音楽や衣装、メイク、ヘアセットにいたるまで、作品にあわせて唐の時代を再現することにこだわった。仲間とともに時代を越えた体験は、一生忘れられない思い出になった。

自国どころか他国のトレンドに触れる機会はなかなか多くないはずだ。ましてや、現代のみならず古の文化に思いを馳せる経験は少ないことだろう。それでも、最後まで私の声を聴いてくださったあなたとは、世代や国籍に関係なく、しばしの「唐の時代ヘタイムスリップ」、ご一緒に楽しむことができていましたら幸いです。

清水 絵里子 (しみず えりこ)

東京都出身。慶應義塾大学法学部政治学科中国語インテンシブコース卒業。同大学メディア・コミュニケーション研究所修了。日本貿易振興機構（JETRO）にて中国経済調査を担当、セミナー講演や記事の編集・執筆に従事。現在は、中国広東省広州市に在住し、中国トレンドやカルチャーについて音声を中心に配信している。YouTube、Podcastなどで「ホッとチャイナ」運営、本作品で登場した流行語解説やダンスを公開している。Voicy「毎日新聞ニュース」第五期パーソナリティ。

「私の中国物語」その④

青島のバス停

高校生 高橋 未来

あの日バス停で誓った約束は今も尚続いている。

私が中国の青島に来たばかりのこと。当時私は小学校1年生。中国語も英語も話せない私にとって初めての海外在住。私の目に映る青島は異世界で、不思議で魅力的で宝を探す冒険のようだった。

忘れもしないあのバス停。毎日私たちと共に孫の幼稚園の送迎バスを待つ、同じマンションに住むおばあちゃんがいた。当時青島では外国人が珍しかった。興味本位で

日本人である私たちに話しかけてくれたおばあちゃんとの出会いが、一生忘れられない出会いになったのだった。

これをきっかけにバスを待つ間、会話をするのが日課になっていた。私、私の母と弟。同じ幼稚園に通う弟の友達とそのおばあちゃん。いつもバス停には5人が仲良く会話をする光景が広がっていた。初めは英語が話せる弟の友達を頼りに、身振り手振りで何とか意思疎通していた。しかし日を重ねるにつれ、伝わらないことも増

えていた。そこで私の母は紙とペンを持ち、慣れない手つきで中国語を書いた。事前に調べて伝えたい内容をメモするという案だった。私たちにはおばあちゃんと話したいという熱い感情が芽生えていた。

翌日、おばあちゃんに中国語が書かれた紙を渡した。会話の幅が広がり、自分の伝えたいことが伝わることに私の心は晴れ晴れとしていた。しかし私の心とは裏腹におばあちゃんの顔色は曇っていった。いつも元気で明るいおばあちゃんの暗い表情を見るのは初めてだった。車が走る騒音だけがバス停に鳴り響いた。周りは騒がしいはずなのにとても静かだった。そしてようやくおばあちゃんが悲しい顔で、ごめんねと手を合わせた。そして弟の友達が口を開いた。

「僕のおばあちゃんは文字が読めないんだ」

この言葉を母を介して聞いた時、私はショックを受けた。なぜ自分がショックを受けているのか、小学生の私には分からなかった。同情なのか悲しみなのか。さっきまで降っていた雪は雨へと変わっていた。

おばあちゃんが文字を読めないことを知った翌日、私はおばあちゃんと会話するのが怖くなっていった。おばあちゃんもきっとそうだろうとため息をついた。自分達の当たり前が引き起こした悲劇を恥じた。雪だるまも退屈にバスを待つ頃。いつもの見慣れたふたつの人影が遠くの方に見えた。おばあちゃん達だ。おばあちゃんの手にはなんと紙とペンがあった。そして中国語が書かれた紙を私たちに渡した。漢字で何となく読み取った言葉は「文字読めないけど頑張って勉強する」だった。嫌われたと思い込んでいた私は、意外な展開に驚きを隠せなかった。そして、とても嬉しかった。私の勝手な憶測だが、文字が読めないことはおばあちゃんにとってコンプレックスであったと思う。それを外国人である私たち日本人に知られては、中国人としてのプライドが傷ついたであろう。もし私なら恥ずかしさと悲しさに負け、その人とは距離を置くと思う。しかしおばあちゃんは違った。距離を置くどころか、私たちと会話をするために文字を勉強するというのだ。バス停で出会った私たち日本人に、それまでして何故会話をしたいのか。それはおそらく、彼女にとって初めての日本人だったからであろう。そして私たちにとって初めての中国人は、おばあちゃん達だったのだ。私たち日本人が中国人のおばあちゃん達と話したいという強い想いは、おばあちゃんも同じであった。

それから私たちは、中国語の勉強を一生懸命にした。新しい単語を覚えては紙に書き、寒い雪の中バス停で

おばあちゃん達と会話する日々が続いていた。だが、そんな幸せな毎日は思っていたよりも早く終止符を打つことになった。私たちは上海に引っ越すことになったのだ。

バス停へ向かう最後の日。私は家を出る前に髪を束ねた紐をキュッと結び直した。そして、バス停への雪道を歩いた。歩く度に聞こえる雪の音は、おばあちゃん達との思い出を回想させた。バス停に着くと、おばあちゃんは何かを手にしていた。なんと私たちに手紙を書いてくれたのだ。手紙を渡されたときのおばあちゃんの笑顔は一生忘れない。手紙には「私は文字の勉強を続ける。だからあなた達も中国語の勉強を続けてね。がんばれ。」と書かれていた。これが青島生活最後の日に誓ったおばあちゃんと私たちの約束だった。そして手紙の最後に書かれた「謝謝」の2文字。少し震えた字がおばあちゃんの一生懸命さを物語っていた。私が青島での冒険の中で、探していたものは出会いという名の宝だったのかもしれない。

高校生になった私は今も尚、中国語の勉強をしている。私が中国語を話せるようになったと知ったらどんな反応をするだろう。そしておばあちゃんは文字の勉強を続けているだろうか。バス停で出会った奇跡は、私の運命を変えることになった。中国語を勉強し続けることであの日の約束は守られ続ける。だから私は中国語を学び続ける。これからも、ずっと。



おばあちゃんたちとお別れの日バス停で撮った唯一の写真

高橋 未来 (たかはし みら)

小学校の約5年間で中国（青島と上海）で過ごす。中国での人々との出会いをきっかけに、中国語の勉強を始める。中国で生活をするなかで、中国の良さや温かさを知る。そして、第二の故郷となる。日本への帰国後、中国への愛が募る。中国への愛は加速するばかりで、中国への留学を決意する。しかし、コロナの影響でオンライン留学に。中国に行ける日を夢にみて、今も中国語を勉強し続けている。好きな食べ物は麻辣湯と豫園のトウモロコシ。